

## あとがき

本書は、筑波大学体育専門学群や大学院において、高松薫先生のもとでコーチングやトレーニングを語り合った者たちが、現在までの活動の成果を持ち寄ってまとめたものです。タイトルとして「競技スポーツにおけるコーチング・トレーニングの将来展望」を掲げています。これには、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会が終わった後も、競技スポーツ界にとって追い風となっている現在の機運を継続させ、さらに発展させていきたいという願いが込められています。そのような視点、観点に立ち、それぞれの立場から将来に向けた課題を提言する内容となっています。

また、サブタイトルとして「実践と研究の場における知と技の好循環を求めて」を掲げています。2017年に開催された平昌冬季オリンピック・パラリンピック競技大会における日本人選手の活躍は記憶に新しいところですが、ここで活躍したアスリートたちの特徴として、科学的エビデンスをもとにしたパフォーマンス向上への取り組みがあったと、私はとらえています。まさしく、「知と技の好循環」の成果として日本人選手の好成績があったのです。

日本の競技スポーツ界は、長きにわたって国際競技力に劣ると言われ、その理由として「実践と理論の乖離」が指摘されてきました。最近、国際大会で日本人選手が活躍している背景には、そのような問題が解消されてきていることが挙げられるでしょう。

私が大学で学んだのは40年近く前のことになりますが、その頃から高松先生は「科学をよく知った競技者・指導者、現場をよく知った研究者」の重要性を説いていました。それはまさしく「実践と理論の融合」につながるものと思っています。

私ごとになりますが、現在、日本陸上競技連盟の強化委員長として、つまり現場の責任者として来年の東京オリンピックを目指しています。「メダルや入賞を1つでも多く」「その舞台に立つアスリートをひとりでも多く」という2つの大きな目標を掲げて強化施策を進めていますが、それらを実現するための重要な課題として「科学的エビデンスにもとづいた強化の推進」があります。特に、東京の8月は厳しい暑熱環境が予想されます。そのような環境下でアスリートたちが持てる力を遺憾なく発揮できるよう、長い時間と大きなエネルギーをかけて準備してきています。2020年東京オリンピック・パラリンピッ

ク競技大会において、日本における「実践と理論の融合」の成果を遺憾なく発揮できることを願っています。

コーチングやトレーニングの成否は、最終的にはものの考え方だと思います。本書には、執筆者それぞれの実践や研究の成果とともに、コーチングやトレーニングの将来を考える様々な示唆が詰まっています。それらが、これからの日本の競技スポーツ界にとって有益なものとなることを期待しています。

2019年 晩秋  
編集委員 麻場 一徳

## 追 記

本書出版準備の最中、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の2021年への延期が発表されました。選手や関係者の方々にとっては、非常に厳しい日々を過ごすことになろうかと思えます。しかし、ここをポジティブに考え、良い準備期間として有意義に過ごしたアスリートが2021年夏に素晴らしい成果をあげるものと信じています。関係各位の健闘を心よりお祈りいたします。

2020年3月末  
編集委員 麻場 一徳